過去5年間における出生前診断に関するアンケート調査

(分担研究：新生児外科的疾患に関する総合的研究)

長 屋 昌 宏

要約：新生児症例の全てが外来患者で占められる私共の施設に於ける出生前診断の現況が如何なるものなのかを知るために，過去5年間に患者の紹介を受けた産科施設にアンケート調査を依頼した。その結果，出生前診断に関して，各施設とも関心を持っており，そのための手段を備えていた。しかし，診断率に関してはいまだ低く，この方面の研究を積極的に行っている大学病院などの資料と比較して満足できなかった。

見出し語：出生前診断，超音波診断

新生児外科症例の全てが外部からの紹介患者で占められる施設に於ける出生前診断の現況がいかなるものなのかを知るために，過去5年間に患者の紹介を受けた産科施設にアンケート調査を依頼した。調査内容は表1のような簡単なものとした。

表1 出生前診断に関するアンケート調査
(1983-1987年の5年間)
愛知県コロニー小児外科

○出生前診断の有無
○方法
○時期
○診断名
○出生前診断の対する感想

I　アンケートの回収率(表2)

61施設に186症例のアンケート用紙を送付し，57施設(93%)から155症例(83%)を回収した。57施設の内容は大学病院が1，総合病院が26，個人病院ないし医院が30であった。

表2 アンケート調査の回収率

61施設に送付し、57施設から回答。回収率：93%
186症例の用紙を送付し、155症例を回収。回収率：83.3%

II　アンケート結果の分析

出生前診断を行っていると答えた施設は49施設

愛知県コロニー中央病院　小児外科(Department of Pediatric Surgery, Central Hospital, Aichi Prefectural Colony)

(86%)であり，行っていないと答えた施設は8施設(14%)であった(表3)。このうち3施設は超音波診断装置(以下ECHO)を妊娠の確認のためだけに用い，他の5施設(8%)のみがECHOを所有していなかった。

表3 アンケート結果(1)

	施設数(%)
出生前診断を行っている	49(86%)
出生前診断を行っていない	8(14%)
(ECHOは妊娠の確認のため：3)	
ECHOを所有してない：5)	

一方，症例別では表4のように，回答の得られた155症例の内143例(92%)で出生前診断が試みられた。このように出生前診断装置の普及は著しく，大多数の症例でそれが試みられていた。ECHOに

表4 アンケート結果(2)

	例数(%)
出生前診断が	
試みられた症例	143例(92%)
試みられなかった症例	12例(8%)

よる診断が妊娠中どの程度に施行されているかを調べてみた(表5)。妊婦が診察に来る度と答えたものが13施設あった。妊娠初期，中期，後期と定めて行っていたところが16施設あり，初期，後期の2回が15施設であった。このようにECHOによる診断時期と回数にはかなりのばらつきが見られた。また，出生前診断された症例とECHOの時期や回数との間にも明らかな関係は求められなかった。

表5 超音波検査の施行状況

	施設数	診断(+)
診察にくる度	13施設	3例
初期、中期、後期X2の4回	2	1
初期、中期、後期の3回	14	2
初期、後期の2回	15	4
30週に1回	3	
20週に1回	1	
異常妊婦のみ	1	
合計	49	10

出生前診断が試みられた143例で，なんらかの異常が発見された症例は僅かに10例(7%)であり，他の133例では異常なしとされた。このように，実際での診断率は極めて低いものであった(表6)。この期間中に出生前診断された上で来院した症例

表6 アンケート結果(3)

	例数(%)
出生前診断された	10例(7%)
出生前診断されなかった	133例

は表7の10例であった。年次別では初めの3年間は1例ずつであったが，1987年には5例と増加した。診断方法は全例がECHOであった。出生前診断と出生後診断が的中していたのは臍帯ヘルニアの2例，水頭症の1例，仙尾部奇形腫の1例，水腎症の2例であった。他の4例では，いずれも腹部腫瘤の診断で来院し，水腎症が3例，腸閉鎖症が1例であった。出生前診断がなされた時期は表のようにまちまちであった。

表7 出生前診断された症例 (1983-1987)

氏名 NO (年)	出生前診断 方法	時期	診断名	出生後診断名
1 NM(1983)	ECHO	34週	臍帯ヘルニア	臍帯ヘルニア
2 TH(1984)	ECHO	36週	腹部腫瘤	左 P-U狭窄症
3 AY(1985)	ECHO	29週	臍帯ヘルニア	臍帯ヘルニア
4 KS(1986)	ECHO	29週	水頭症	水頭症，など
5 AK(1986)	ECHO	24週	仙尾部奇形腫	仙尾部奇形腫
6 SH(1987)	ECHO	24週	腸閉鎖症	右尿管閉鎖症
7 YH(1987)	ECHO	37週	水腎症	両側 P-U狭窄
8 YK(1987)	ECHO	39週	水腎症	左尿管狭窄症
9 RM(1987)	ECHO	31週	腹部腫瘤	空腸閉鎖症
10 NO(1987)	ECHO	32週	腹部腫瘤	尿道狭窄

Ⅲ 考察と結語

新生児外科領域には出生直後に緊急処置を施す必要がある疾患があり，それを出生前に診断して対処することは極めて意義深いことと考える。超音波診断装置(ECHO)の開発はそれを容易にし，現在著しい勢いで普及し，一般化しつつある。それは今回のアンケート調査においても裏づけられ，ECHO の所有率は91%に及んでいた。そしてかく施設ともが出生前診断に関心を示し，92% の症例でそれが試みられていた。しかるに，診断率でみてみると，未だ十分とはいえず，僅かに10例(7%)が診断されたに過ぎなかった。これらの事実は大学病院やそれに匹敵する大病院を除いた，地域の病院や医院では，ECHOを所有し，出生前診断を積極的に試みてはいるものの，その診断率は未だ低いところにあることを示している。今回のアンケート調査で回答が得られた155 例の新生児外科疾患のうちわけを表 8 に示した。これらの中で，現在出生前診断が可能とされる疾患を上段に，困難なものを下段に分けて示した。表から明らかなように，出生直後に緊急処置を最も必要とし，その意味で出生前診断が最も有効とされる横隔膜ヘルニアや先天性腹壁破裂を20例経験しているにも拘らず，それらの中に出生前診断されたものがいないという皮肉な結果となった。しかし，年次別にみると，出生前診断される症例は確実に増加しており，診断技術の向上と普及が進むにつれて，より理想的な体制ができてくると期待される。

表8 疾患別での診断

疾患名	例数	診断(+)
食道閉鎖症	15例	
横隔膜ヘルニア	14	
十二指腸閉鎖症	15	
腸閉鎖症	18	1例
臍帯ヘルニア	15	2
腹壁破裂	6	
仙尾部奇形腫	4	1
水腎症	5	4
水頭症	1	1
腸回転異常	7	
胃破裂	3	
ヒルシュスプルング	20	
鎖肛	25	
その他	7	
合計	155	10

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:新生児症例の全てが外来患者で占められる私共の施設に於ける出生前診断の現況が如何なるものなのかを知るために,過去 5 年間に患者の紹介を受けた産科施設にアンケート調査を依頼した。その結果,出生前診断に関して,各施設とも関心を持っており,そのための手段を備えていた。しかし,診断率に関してはいまだ低く,この方面の研究を積極的に行っている大学病院などの資料と比較して満足できなかった。